



一〇一七年秋、江戸時代の京都で描かれた、豪華な彩色ジャワ植物図譜が出現した。縦三三三ミ、横二二二ミの大本。本文七七枚は雲母引きの高級和紙である。彩色図はジャワ島の植物図一〇五図、鳥図四図由来不明の植物図二五図からなり、ジャワ島の植物図と鳥図にはアルファベットで現地語名が書き込まれ、仮名書きが添えられていた。

宮中で代々、内醫兼主鈴をつとめた渡邊家の伝来品だった。内醫兼主鈴とは天皇印璽の押印や宮中儀式の世話を担当する地下官人(宮中の下級吏員)である。帙に「五尋庵」と蔵書印を模して墨書した旧蔵者は、好奇心溢れる本草好きの公家が想像される。

図譜(以下、京都本)は無題、無署名であるが、ジャワ島の植物図一〇五図のうち一七図に付けられたオランダ語の解説文とその和訳は、京都における蘭語学の先駆者、辻蘭室(一七五六〜一八三六)の筆跡と判明した。蘭室は公卿久我家の諸大夫をつとめた。内大臣久我信通の遺志を継いで蘭学に志したという。寛政五年(一七九三)頃のことである。

ジャワ植物図一〇五図と鳥図四図のルーツは、スペイン人植物学者フランシスコ・ノローニャ(Francisco Noroña、一七四八頃〜一七八八)が一七八六年、ルソンからバタビヤに到着し、バタビヤ学芸協会の許可と支援を得てジャワ島の植物調査を行った際に作成した原図である。バタビヤ学芸協会はオランダ植民地総督の庇護のもと一七七八年に設立された学会である。ノローニャ自筆本はノローニャがフランスの植民地であったモーリシャス島で病没後、遺産相続人のシャルパンティエ・コシニールからパリの科学アカデミーに送られ、フランス自然史博物館図書館に現存する。島の農園主コシニールは植物学者であり、元出島商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh、一七四五〜一八二二)の友人であった。

パリの原図(以下、パリ本)とは別にバタヴィア由来の二写本、ロンドン自然史博物館本(ロンドン写本)とベルリン州立図書館本が知られる。両者の親近性が指摘されてきたが、二〇一九年五月の在欧写本調査で、京都本の植物図はロンドン本に近いことを確認した。鳥図の原図はパリ本とともに伝わっていた。

京都本の由来を探る手がかりは、植物図の筆跡と特徴にあった。植物図は江戸の蘭学者で津山藩医の宇田川榕菴(一七九八〜一八四六)の筆跡であることが、京都府立植物園大森文庫および杏雨書屋所蔵の榕菴筆植物写生図との比較で判明した。しかも、植物学的に重要な部位のみを抄写する摸写法は、小野蘭山自筆のワインマン『花譜』摸写本(個人蔵)に限られているところから、蘭山による「ジャワ植物図譜」摸写本の存在が想定される。蘭山は幕府医学館に招聘され、寛政二年(一七九九)三月、京都を発ち、文化七年(一八一〇)江戸で没した。

蘭山が図を摸写したであろう原本は、バタビヤから長崎に舶載された洋紙写本から作られ、日本人のためにラテン語またはスペイン語の説明文の蘭訳を添えた和綴じの摸写本であったと考えられる。洋紙写本の舶載に関わった人物としては、ベンガルのチンストラ総督となっていたティチング(在職、一七八五〜一七九二)、出島商館長ファン・レーデ・トット・バルケレール(在日、一七八七〜一七八九)、ツェンペリーの門人で出島医師のステュツェル(在日、一七八七〜一七八八)が候補となる。

文政元年(一八一八)六月、宇田川榕菴は津山から江戸への帰途、京都の木屋町に滞在し、蘭学者藤林普山(一七八一〜一八三六)、蘭方医小森桃塙(一七八二〜一八四三)の二人に会った。榕菴の京都滞在此のときに限られるようだ。この京都滞在中に、辻蘭室と協力して京都本を作ったと推定される。植物図の冒頭四図の現地語名は榕菴の筆跡、他は辻蘭室の筆跡である。

スペイン、オランダ、フランスの植民地科学の草創期に作られた「ジャワ植物図譜」の豪華な写本を、一八世紀末の京都で最初に入手したのは誰であろうか。ティチングが親密に交流し、離日後もワインマン『花譜』を贈った典医荻野元凱(一七三七〜一八〇六)か、あるいはまた蘭室が仕えた久我信通か。公家社会の本草趣味が海外にまで及んだことは確かであろう。

物を知る

辻蘭室訳ジャワ植物図譜

松田清

